

虚しい言葉に依り頼む

[聖書] エレミヤ書 7章 1～11 節

主からエレミヤに臨んだ言葉。主の神殿の門に立ち、この言葉をもって呼びかけよ。そして、言え。「主を礼拝するために、神殿の門を入れて行くユダの人々よ、皆、主の言葉を聞け。イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前たちの道と行いを正せ。そうすれば、わたしはお前たちをこの所に住まわせる。主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない。この所で、お前たちの道と行いを正し、お互いの間に正義を行い、寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げず、無実の人の血を流さず、異教の神々に従うことなく、自ら災いを招いてはならない。そうすれば、わたしはお前たちを先祖に与えたこの地、この所に、とこしえからとこしえまで住まわせる。しかし見よ、お前たちはこのむなしい言葉に依り頼んでいるが、それは救う力を持たない。盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルに香をたき、知ることのなかった異教の神々に従いながら、わたしの名によって呼ばれるこの神殿に来てわたしの前に立ち、『救われた』と言うのか。お前たちはあらゆる忌むべきことをしているではないか。わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巢窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。

[序] むなしい神殿信仰

ヒゼキヤ王の治世第14年(BC701年頃)エルサレムはアッシリア帝国の大軍に包囲されました。ヒゼキヤ王は降伏して、大きな賠償金を支払いました。しかし毎年貢物を沢山取られる重い負担に耐えられなくなり、エジプトと同盟を結んで、アッシリアに反旗をひるがえしました。エルサレムは再び包囲されました。頼みにしたエジプトの援軍は来ません。絶体絶命の窮地に陥ってしまったのです。

ヒゼキヤは王衣を引き裂き、粗布を腰に巻いて、神殿にこもり、悔い改めて祈りました。イザヤにも祈りの助けを頼みました。すると神さまはアッシリア王の心の内に、不安と恐れを惹き起す霊を送り込まれました。アッシリア王は、エチオピアの大軍が攻めてくるとか、アッシリアの都で息子たちの間に権力闘争が起こったといううわさにおびえて、急遽ニネベに引き揚げて行きました。奇跡が起こったのです。エルサレムは救われました。イザヤの晩年 BC688年頃のことでした。

この結果、エルサレムの人々は、この神殿がある限り、どんな国難が襲って来ても、神さまに守られるという神殿信仰を強く持つようになったようです。ヒゼキヤ王から6代後のヨシア王の治世13年、BC626年頃に、エレミヤが預言者として召されました。

神さまはエレミヤに神殿の門に立って、人々に呼びかけるようにとお命じになりました。「主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない」「この神殿は強盗の巢窟に見える」。

[1] 神社と神殿の違い

日本では何処に行っても、その村を守り治める神を祀る鎮守の社があります。人々は農業の豊作や漁業の安全を祈願します。私が30年暮した札幌には北海道神宮がありました。明治の初めに「えぞ」と呼ばれていた地が日本の国土であることを明確にするために、「北海道」と名付け、開拓使を派遣するに先立って、北海道の守り神として大国魂神、大那牟遲神、少彦名神の開拓三神を祀る北海道鎮座祭を明治2年

に東京で行ないました。そして翌年にその祭神を札幌に移して、札幌神社に祀りました。昭和39年には明治天皇をも祭神として祀ることで北海道神宮に昇格したのです。

島根県の松江の西に出雲大社を訪れました。立派な社殿の傍らに小さな社があり、神さまの宿と立て札がたっていました。旧暦の10月に日本全国から神々が集まるので、そのお宿だということです。そこで日本各地では10月が神無月(カミナズキ)と呼ばれています。一方出雲だけは神在月(カミアズキ)です。出雲大社に祀られている大国主命が、日本中の神々を集めるほどの高い徳を備えていると考えられている訳です。

彼は豊葦原瑞穂国と呼ばれる平和で豊かな国を造り上げ、天照大神に国を譲り渡して引退しました。その私心の無さが大きな徳として称えられているのでしょう。また大国主神は、縁結びの神としても有名です。単なる結婚の縁に留まらず、人間同士が皆互いに仲良く結ばれてこそ、明るく楽しい社会が形作られていき、皆が幸福になる。その縁結びに愛情を限りなく注ぐ有難い霊力をもって、人々の暮らしを守って下さると慕われているのだそうです。だから日本中の神々も集まって来るのでしょう。出雲にまで集まって来て、何を話し合うのでしょうか。人々の縁結びについてに違いないと言われていました。結構なお話ですね。

イスラエルの民の先祖アブラハムは、文明の発祥地メソポタミヤ地方から、神さまに呼び出されて、独りカナン地方に出て行きました。そして神さまから「あなたの子孫にこの地を与える」と示された地に祭壇を築いて礼拝しました。彼も息子のイサクも孫のヤコブも、住む所に祭壇を築いて神さまを礼拝し、神さまの指示を聞き取りながら、生涯を送りました。

世界的大飢饉に襲われてエジプトに移住したイスラエルの民は、約400年後にモーセに率いられてエジプトを脱出し、カナンの地に戻ってきました。その途中シナイ山で神の律法十戒を授けられて、神の民としての明確な自覚を持ちました。十戒の記された石の板を箱に納め、神さまが共に進んでくださる徴として、大切に運びました。

カナンの地に定住するようになり、シロに神の箱を安置しました。ところがペリシテ軍にシロを破壊され、神の箱は奪われてしまいました。ダビデ王の代になり神の箱を取り戻し、エルサレムの都に安置しました。そしてダビデの息子ソロモン王の代になってやっと神殿が建立され、神の箱はその神殿の至聖所におさめられました。

ソロモンは神殿の完成式の時にこう祈っています。「神は果たして地上にお住まいになるのでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です。この所に向かって僕がささげる祈りを聞き届けてください。僕とあなたの民イスラエルがこの所に向かって祈り求める願いを聞き届けてください。どうか、あなたのお住まいである天にいまして耳を傾け、聞き届けて、罪を赦してください。」(列王記上8:27～30)

この祈りで分かりますように、イスラエルの民は神殿を神さまの住いとは考えていません。神さまというお方は、たとえ7年の歳月をかけて国家の総力をあげて建設した神殿だとしても、人間の造った建物の中

に納まるような小さなお方ではないのです。ただ昼も夜も絶えずこの神殿に目を注ぎ、耳を傾けて下さり、ここで、またこの神殿に向って捧げる私たちの真心込めた祈りを聞き入れて、答えてくださる天の神さまと私たちとの接点として、この神殿があるという信仰なのです。

アブラハムたちがこしらえた祭壇も、そこで神さまに捧げ物を献げて礼拝し、神さまの御心を聞き取り、それに聞き従っていく決意を表していく場所でした。自分たちのいろいろな願い事をあれこれ注文するのではなく、神さまの望んでおられる生き方を心に刻んで実践していきますと応答していく場所でした。十戒の記された石の板を神殿の至聖所におさめておくのも、私たちの生活の指針が示されているからなのです。この点で、ただ願い事を捧げて拍手を打って拝礼する日本の神社と、聖書の神殿とは違います。

[2] 強盗の巢窟に様変わりする神殿

「主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない」と神さまはおっしゃいます。都の中心に立派な神殿がこれこの通りに建てられている。我々はこのように礼拝を捧げている。だからどんな時にも神さまの守りがあると思っはならない。自分の道と行いを正さなければ、どうして祈りが答えられるだろうか。道とは神ならざる神になびき、従っていこうとする道です。行いとは寄留の外国人、孤児、寡婦を虐げたり、無実の人の血を流したりする行いです。盗み、殺し、姦淫し、偽って誓い、バアルの神に香をたく行いです。

礼拝とは、自分の様々な欲から生まれる願い事を、神さまにすがってかなえてもらう行為ではありません。信仰は自分の道や行いを正しくしていく心を養う真剣な営みです。自分の道や行いを正していくことが、一向に現れて来ない信心とは、一体何なのでしょう。欲望から生まれる願い事を神の座に据えて拝んでいる行い、信仰とは言えない行いです。

エレミヤから660年ほど経った紀元30年頃のことです。イエスさまが十字架にかかるためにエルサレムの都に入城された時に、先ずなされたのが、神殿の境内に入って行き、そこで商売している人々を追い払い、両替人の台や鳩を売る者の腰掛をひっくり返されたことでした。「私の家はすべての国民の祈りの家と呼ばれるべきである。ところがあなたたちは、それを強盗に巢にしてしまった」(マルコ 11:17)とおっしゃっています。これはまさにエレミヤが叫んだ言葉です。

エレミヤの時代に、ヨシヤ王は熱心な宗教改革を行なって、神ならざる神に献げ物を捧げる礼拝になりがちな村々の祭壇をどんどん取り壊しました。年三回の大事な祭りには国中の者が皆、エルサレムの神殿に参拝するよう求められました。神殿では牛・羊、貧しい者は鳩を献げ物として捧げます。遠路を旅して集まる人々は、連れて来れないので、境内で買って捧げます。神殿税も特別な神殿用貨幣で納めるので、両替しなければなりません。

そのために神殿内に商売の店が数多く並ぶようになりました。一銭でも多く儲けようとする欲得が渦を巻き、商人と神殿当局の間にリベートなどの金が動きます。神殿が礼拝者で賑わうにつれて、祈りの家が強盗の巢窟に様変わりしていきました。そしてそれがおかしいと思う人が居なくなってしまったのです。このような状態がどうして聖なる神さまと神の民の接点といえるのでしょうか。大体礼拝する場所に献げ物を売買したり、献金を両替する商売を持ち込むなど、不必要です。墮落させるものを祈りの家から、努めて取り除く

心が大事ではないでしょうか。エレミヤが叫び、イエスさまが力を振ったのは、当然のことでした。

ところがエレミヤの言葉は無視されました。20章、26章の記述によると、神殿当局に捕えられ、死刑になりかかっています。イエスさまの場合も、「祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、どのようにして殺そうかと謀った」と記されています。そして4日後に十字架刑になったのでした。神殿の本来の意義がなおざりにされる時、神殿が国を滅ぼしていく人間の重い罪を現わす場になるのです。

[3] 神社が果たした誤った役割

1895年(明治28年)日清戦争に勝利した日本は、台湾を領有することになりました。6年後に台湾総督府は台湾総鎮守の社として台湾神社を創建しています。1910年に日本は大韓帝国を併合して、朝鮮半島を領有しました。そしてやがて京城に朝鮮全土の総鎮守として、天照大神と明治天皇を祭神とする朝鮮神宮を創建しました。これは北海道開拓に当って、先ず札幌神社を建てたのと同じ発想だったのかも知れません。

しかし文化や民族性の違う外国の地では、日本国内の場合のように、ことがスムーズに運びません。例えば朝鮮神宮の場合ですと、お前たちも日本の国民になったのだから、参拝して朝鮮の繁栄と日本全国の繁栄を祈願するようにと勧められます。1932年に日中戦争が始まりますと、戦勝祈願するようにと参拝が強制されるようになります。キリスト教会の中に警察官立会いという状況から、神社参拝を決議する教会が増えていきました。そこで信仰の自由が侵されると反対した牧師・信徒が2000人検挙・投獄される事態になりました。200の教会が閉鎖になり、50人が獄中で死にました。こうして、朝鮮の人々に恵みをもたらすために建てられたはずの神社が、国家権力の朝鮮支配の苛酷な道具になってしまったのでした。宗教にはこのように権力に利用され、悪に加担して、本来の任務とは逆の働きをしてしまう危険を、はらんでいるのです。

シンガポールでも、日本軍が占領するや、直ちに伊勢神宮の分社、昭南神社が建立されました。これなどは天皇の威光と支配を東南アジアに示すためのもの以外の何物でもありませんでした。ですから敗戦と同時に爆破されて、跡形も無く消えてしまいました。軍国主義日本がアジア諸国に示した天皇の威光とは、こんなに哀れで情けないものだったのです。

むなしい言葉といえば、戦時下の国民を鼓舞した「神風が守る不滅の神州日本」という言葉がありました。鎌倉時代に蒙古の大船団が九州に押し寄せてきた時に、二度とも台風が襲来して敵船を沈没させて、退却させたという歴史が殊更に取り上げられて、米英の大軍が襲来しても、神の国日本は、神風に守られて、負けることはないという迷信に国民は洗脳されてしまっていました。若者たちが神風特攻隊になり、爆弾をだいて敵艦に突っ込んでいき、あえない無駄死を遂げました。まさに「主の神殿、主の神殿、主の神殿という、むなしい言葉に依り頼んではならない」というエレミヤの言葉の通りでした。

[結] 滅びるな

神さまが私たちに求めておられることは、神さまの前に立って、自分の歩む道と行いを反省し、正しく保つことです。ヤコブの手紙にこう記されています。「人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます」(1:14~15)。

外国人や孤児や寡婦などの社会的弱者を苦しめたり、偏見や誤解から人を不当に責めたりしていないかどうか、盗みや殺しや不品行や嘘をついていないかどうか、これらの罪はみな欲望から生じます。欲望・誘惑・罪・死。私たちは絶えず清められ、どんな人とも仲良く助け合って生きていかなければなりません。神さまは、それを求めて絶えず私たちに語りかけておられるのです。

「人間同士が皆互いに仲良く結ばれてこそ、明るく楽しい社会が形作られていき、皆が幸福になるのだ」と人と人との縁結びを大事にした大国主命、日本中の神々が 10 月に出雲に集まって、この縁結びを日本中に広める話し合いをするという出雲大社の信仰——これはエルサレムの神殿の入り口でエレミヤに叫ばせた神さまの御心と同じです。

「お前たちの道と行いを正せ」。「むなしい言葉に依り頼んではならない」。「滅びる」。私たちは神さまのこの呼びかけをしっかりと聞き取って、真剣に応えていく今週の歩みを進めていかなければなりません。